

『防衛省・自衛隊の防災訓練』

(2022年7月放送) ※第1部

MC : ○ リスナーの皆さんこんにちは。「防衛問答近中でごさる」、この番組は防衛省近畿中部防衛局の協力によりお届けします。前回の放送では、防衛補佐官の『令和4年度防衛省の主要事業』のお話を興味深くお聞きしました。今回の放送では、皆さんにとってより身近な問題である防災についてお聞きしたいと思います。

○ 本日は、この4月に新しく地方協力確保室長に就任されたAさんにお越し頂きました。A室長は、今年3月迄、この番組でもいろいろとお世話になりました。B室長の後任とお聞きしています。それでは、A室長よろしくお願ひします。

A : ○ 皆さんこんにちは。近畿中部防衛局地方協力確保室長のAです。先ほどご紹介頂きましたように、今年4月に前任のB室長の後任として着任しました。どうぞB室長同様によろしくお願ひします。本題に入る前に簡単に自己紹介させて下さい。

MC : ○ お願ひします。

A : ○ わたしは、近畿中部防衛局の前身である大阪防衛施設局に入庁以来、主に国有財産管理業務を担当しておりましたが、令和元年に、米軍基地で働く日本人従業員の労務管理を担当する独立行政法人駐留軍等労働者労務管理機構に向向し、昨年、近畿中部防衛局に戻りまして、当局の訴訟業務を担当する訟務官を努めた後、本年4月から地方協力確保室長を努めることになりました。どうぞよろしくお願ひします。

MC : ○ ありがとうございます。この番組を楽しみにお聞き下さっているリスナーの皆さんもたくさんいます。これからも貴重なお話、よろしくお願ひします。

それでは、今回はどのようなお話ですか。

A : ○ 今回は、今年3月に、近畿中部防衛局が、YouTube で配信した令和3年度防衛問題セミナー「南海トラフ巨大地震に備えて！」の中から、自衛隊和歌山地方協力本部の本部長にご講演を頂いた「防衛省・自衛隊の防災訓練」の内容に沿って、防衛省・自衛隊の災害対応や防災訓練について、お話させていただきます。よろしくお祈いします。ところでMCさん、最近関西地方で地震が多いと感じませんか。

MC : ○ そうですね。この放送局がある和歌山県北部でも確かに地震が多いように感じます。

A : ○ 4月に開かれた気象庁・地震調査委員会の会見によれば、3月に日本列島や周辺域で起きたマグニチュード4以上の地震が、195回観測されており、これは平常時の1ヵ月平均の倍以上だそうです。

MC : ○ そんなに揺れているんですか。驚きました。

A : ○ はい。それでは、防衛省・自衛隊の防災訓練のお話をする前に、防衛問題セミナーのテーマにもなっています南海トラフ巨大地震について、お話ししたいと思います。和歌山県の太平洋沖合には、過去に巨大地震を引き起こしてきた南海トラフがあり、ほぼ100年から150年間隔で繰り返し地震が発生してきました。

○ 南海トラフとは、駿河湾から日向灘沖にかけての、海底の船底のような、溝状の地形を指しますが、この南海トラフ沿いで発生する地震のことを「南海トラフ地震」と呼び、東海、東南海、南海、日向灘の4つの大きな震源域があります。

○ 前回の南海トラフ地震である昭和19年（1944年）の昭和東南海地震及び昭和21年（1946年）の昭和南海地震が発生してから、80年近くが経

過しており、次の南海トラフ地震の発生が危惧されています。

MC : ○ 和歌山県に住む人間にとっては、とっても心配です。それでなくても、平成23年(2011年)3月の東日本大震災以降、この10年の間だけでも、平成28年(2016年)の熊本地震や平成30年(2018年)の北海道胆振東部地震などの大きな地震が続いており、とても心配です。

A : ○ そうですね。今年の1月に政府の地震調査委員会が、国内で可能性のある地震の最新の発生確率を公表し、南海トラフで今後40年以内にマグニチュード8~9クラスの地震が発生する確率を、前年の「80~90%」から「90%」程度に引き上げられています。

○ 東京大学名誉教授の平田委員長は、「日本は世界的にみて地震が起きやすい場所だ。どこで起きてもおかしくないなので、備えを進めてほしい。」と警鐘を鳴らされています。

○ ところでMCさんは、地震の表現に「マグニチュード」と「震度」という言葉が使われますが、違いをご存じでしょうか。

MC : ○ 確か「マグニチュード」は地震そのものの大きさ、規模を表すものさしで、「震度」は地震が起きた時の私たちが生活している場所での、実際の揺れの強さを表していると聞いたことがあります。

A : ○ よくご存じですね。「マグニチュード」と「震度」の関係は、例えばマグニチュードの小さい地震でも、震源からの距離が近いと地面は大きく揺れ、「震度」は大きくなりますが、「マグニチュード」の大きい地震でも、震源からの距離が遠いと地面はあまり揺れなく、「震度」は小さくなるそうです。

○ ちなみに、平成7年(1995年)1月に発生した阪神・淡路大震災は、マグニチュード7.3、最大震度7の大地震でしたが、想定される南海トラフ地震は、それ以上の巨大地震となる恐れがあります。

MC : ○ 前回、昭和21年(1946年)12月に発生した昭和南海地震はマグニチュード8.0の巨大地震で紀伊半島や四国地方に大きな被害をもたらしました。

○ この和歌山県でも地震により建物が壊れたり、津波、火災の被害により、死者・行方不明者269人、負傷者562人、住居全壊969戸、流出325戸、焼失2,399戸という多くの人命と財産が奪われました。いつ来るか分からない地震ですが、人命と財産を守るための日頃からの備えが大切だと思います。

A : ○ MCさんがFMマザーシップを開局されたのも阪神淡路大震災の経験などをもとに、日頃から災害の恐ろしさを伝えながら、地域住民に寄り添う放送を続け、いざという場合に頼りになる存在でありたいとのお気持ちからとお聞きしました。

MC : ○ はい、私が生まれ育った広川町は、1854年の安政南海地震で大きな津波災害を経験した土地で、近い将来発生すると言われている南海トラフ巨大地震で自分たちの町も同じようになるのではないかと強い危機感を持っています。

A : ○ 南海トラフ沿いで発生する地震の中でも科学的に想定される最大クラスの南海トラフ地震を「南海トラフ巨大地震」と呼んでいます。政府の中央防災会議の被害想定によれば、南海トラフ巨大地震が、ひとたび発生すると、静岡県から宮崎県にかけての一部では、震度7となる可能性があるほか、それに隣接する周辺の広い地域では、震度6強から6弱の強い揺れになると想定されています。

○ また、関東地方から九州地方にかけての太平洋沿岸の広い地域に、10メートルを超える大津波の襲来が想定されています。この被害想定は、発生過程に

多様性がある南海トラフ地震の、一つのケースとして整理されたものであり、実際に、この想定どおりの揺れや津波が発生するというものではありません。また、南海トラフ巨大地震は、千年に一度、あるいは、それよりも発生頻度が低く、次に発生する南海トラフ地震を予測したものではないことにも、留意が必要です。

MC : ○ 東日本大震災も千年に一度の大震災と言われましたが、それでも現実には起きてしまいました。本当にいつ起きるか分からないのが地震の怖さだと思います。

A : ○ 脅かすようで恐縮ですが、日本各地で地震が頻発しており、令和元年以降、震度5強の地震だけでも13回、そのうち最大震度6強が4回、各地で観測されています。ほぼ毎年1回、震度6強の地震に見舞われていると言えます。

○ ちなみに、震度5強とは、物につかまらなると歩くことが難しい、棚にある食器類や本で落ちるものが多くなる、固定していない家具が倒れることがある、補強されていないブロック塀が崩れることがあるなどの揺れになります。

○ さらに6強となれば、這わないと歩くことができず、飛ばされることもある。固定していない家具のほとんどが移動し、倒れるものが多くなる。耐震性の低い木造建物は、傾くものや倒れるものが多くなる。大きな地割れが生じたり、大規模な地滑りや山林の崩壊が発生することがあるような、とても大きな揺れになります。

MC : ○ 先月も石川県の能登半島で震度6弱の地震があったばかりですが、令和元年以降、最大震度6強の地震が、ほぼ年一回はどこかで起きているとお聞きすると本当に恐ろしく感じます。

A : ○ 世界で発生するマグニチュード6以上の地震のうち、約2割が日本周辺で起きるため、わが国は「地震大国」と呼ばれています。太古から日本列島は巨大

地震に見舞われてきており、日本書紀にも記載されている684年に起きた白鳳地震は、南海トラフ巨大地震と推定される記録上確認できる最古のものとなります。

○ ちなみに、研究者の中には、次の南海トラフ巨大地震が起きれば、東日本大震災の10倍以上となる犠牲者や被害額が想定されると警鐘を鳴らされている方もいます。

MC：○ 犠牲者や被害額が東日本大震災の10倍以上になると言われても想像を絶する気がします。

A：○ お金の話で恐縮ですが、被害総額は、わが国税収の約3倍になるとの話もあり、とんでもない被害になることは、疑う余地がないと思います。

○ さらに、地震以外にも、和歌山県は南北の距離が長く、北部と南部では気候が異なり、和歌山市など県北部は、瀬戸内海式気候に属し、年間を通じて天気や湿度が安定しており、降水量も少ないです。一方、県南部は太平洋岸式気候に属し、黒潮の影響を受け、温暖で台風の影響を受けやすく、極めて降水量の多い地域となっています。

MC：○ そうですね。南部ほど温暖で降水量が多いイメージがあります。

A：○ 過去に和歌山県では、6～7月の梅雨時期と9～10月の台風時期に、大雨による災害が発生しています。明治22年（1889年）8月18日～19日にかけて、台風の影響で、紀伊半島は豪雨となり、和歌山県で、1,200人を超える死者が出ています。

○ 昭和28年（1953年）7月17日～18日にかけて、梅雨前線の活動により豪雨となり、約25万人の県民が被災され、1,000（せん）人を超える死者・行方不明者が出ました。

○ 記憶に新しいところでは、平成23年（2011年）8月30日～9月4日

にかけて、台風12号に伴う大雨により、和歌山県では死者56人、行方不明5人の人的被害となりました。新宮市高田で、9月4日4時までに降った24時間降水量は、1,044ミリという驚異的な大雨を記録しました。ちなみに、新宮市の年間降水量は、3,300ミリ程度であり、一日で年間降水量の約3割に相当する雨が降ったこととなります。

MC：○ それでは、ここで演奏をお聴き頂きながらひとまず休憩です。

～演奏～

MC：○ ここからは、今回放送のテーマとなっている防衛省・自衛隊の災害対応や防災訓練のお話になります。引き続き、A室長よろしくお願いします。

A：○ はい、よろしく申し上げます。冒頭でもお話しましたようにここからは、今年3月に、近畿中部防衛局がYouTubeで配信した、令和3年度防衛問題セミナー「南海トラフ巨大地震に備えて！」の中から、自衛隊和歌山地方協力本部の本部長にご講演を頂いた、「防衛省・自衛隊の防災訓練」の内容に沿って、お話させていただきます。

○ まずは、防衛問題セミナーでご講演を頂きました、自衛隊和歌山地方協力本部の本部長をご紹介させていただきます。本部長は、防衛省運用企画局事態対処課国民保護・災害対処室部員、統合幕僚監部参事官付企画官、防衛政策局訓練課訓練企画室長などを歴任され、令和2年(2020年)8月、自衛隊和歌山地方協力本部長に着任されました。

○ 和歌山地方協力本部は、和歌山県における自衛官の募集、退職自衛官の就職援護、予備自衛官に関わる業務、各種事態生起時における関係自治体との連絡調整業務のほか、自衛隊の広報活動などを行い、地域の皆さまと自衛隊の架け

橋となる役割を担っています。

MC : ○ 和歌山地方協力本部には、このマザーシップの番組にご出演頂いたこともあり、自衛隊と和歌山の企業・地域・住民とを結ぶ窓口として活動されています。

A : ○ それでは、まずは自衛隊の災害派遣の沿革からお話します。防衛省・自衛隊の役割は、「主たる任務である国の防衛」、「災害派遣・テロ等多様な事態への対応に係る任務」、「国際社会の平和と安全の維持に貢献する国際協力」と大きく3つに分類されますが、そのほかに付随的任務として、昨年東京オリンピック・パラリンピックでの国旗掲揚や警備支援、南極観測船「しらせ」の運用協力などがあります。

○ 皆さんの中には「自衛隊」イコール「災害派遣」というイメージを持たれている方も多いと思いますが、災害派遣は「公共の秩序の維持」のため「必要に応じて行う任務」となっています。

MC : ○ 阪神淡路大震災以降、様々な災害で自衛隊が活動されている場面を多く目にしてきたことから、どうしても「自衛隊」イコール「災害派遣」と思っていますね。私たちが自衛隊の災害派遣をよく目にするようになったのは、阪神淡路大震災からの気がしますが、それ以前も活躍されていたのでしょうか。

A : ○ はい、防衛省・自衛隊の災害派遣の歴史は古く、昭和26年（1951年）までさかのぼり、昭和26年10月20日に発生した「ルース台風」被害に対し、山口県知事からの要請により、自衛隊の前身である警察予備隊が出動しています。その後、昭和29年（1954年）の自衛隊創設時に自主派遣の制度が追加されました。

MC : ○ 昭和26年10月の「ルース台風」被害が最初の災害派遣とお聞きし、余談になりますが、この頃の大きな台風にはそれぞれ「伊勢湾台風」や「室戸台風」といった名前がついていたことを思い出しました。

A : ○ 台風や大雨などの自然災害以外の身近なところでも、昨年10月3日、和歌山市において、紀の川に架かる水道橋が崩落し、市内で大規模な断水が発生したことが、皆さまのご記憶にあるかと思いますが、その際にも、大阪府和泉市に所在する陸上自衛隊信太山駐屯地から、第37普通科連隊などの隊員が、約一週間にわたり給水支援を実施しているんですよ。

○ また、昨年11月16日には、兵庫県姫路市において、鳥インフルエンザが発生したため、姫路市に所在する陸上自衛隊姫路駐屯地から、第3特科隊の隊員が養鶏場における殺処分等の災害派遣を実施しました。

MC : ○ 紀の川の水道橋の崩落は、和歌山県内での出来事でもあり私たちもニュースでよく目にしました。その他、自然災害以外でも様々な場面で活躍されているんですね。

A : ○ はい。皆さんの生活に著しい影響を及ぼしている新型コロナウイルス感染症への対応として、令和2年(2020年)1月のダイヤモンドプリンセス号への医官等の派遣に始まり、空港での検体採取などの水際対策、離島で感染した患者の輸送、自治体などでの防護服着脱要領の教育、自衛隊病院での新型コロナウイルス患者受け入れなどの対応も行っています。

○ また、皆さんもよくご存じの東京及び大阪における新型コロナワクチンの自衛隊大規模接種会場の運営は、今も行っているんですよ。

MC : ○ 以前の放送で、防衛省・自衛隊はわが国の「最後の砦」であり、新型コロナウイルス感染症という国家の危機管理上重大な課題に対して、その役割を十分に果たすよう努めてこられたとお聞きしました。本当に私たち国民にとって心強い存在だと思います。

A : ○ ありがとうございます。ご紹介したのは活動の一例であり、自衛隊は災害の発生時には、地方公共団体などと連携・協力し、被災者や遭難した船舶、航空機

の捜索・救助、水防、医療、防疫、給水、人員や物資の輸送など国民に寄り添う形で、様々な活動を行っています。

(第2部へ)